

book

アントワーン・コンパニオン 著  
 今井勉 訳  
 ▶ 第二の手、または引用の作業  
 3・10刊 A5判574頁 本体8000円  
 水声社

# 「引用史」とも呼ぶべき 壮大なパノラマを提示

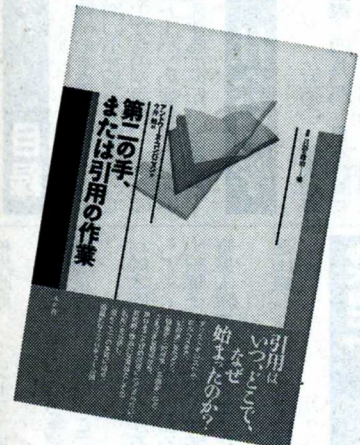
コンパニオン、貴重で真摯な文学理論家

土田知則

本書はコレージュ・ド・フランスの教授で、いまやフランスで最も有名な文学研究者の一人となりつつあるアントワーン・コンパニオン(一九五〇年、ベルギー生まれ)が一九七九年に発表した初めての理論的著作である。コンパニオンには理論的関係のものだけでもこれまで二〇冊以上の著作があり、そのうちの二冊は既に邦訳されている(『近代芸術の五つのパラドックス』〔中地義和訳、水声社、一九九九年〕、『文学をめぐる理論と常識』〔中地義和・吉川一義訳、岩波書店、二〇〇七年〕)。因みに、本書のタイトルに使用されている「第二の手」という一見奇妙な表現は、「孫引きの、受売りの、二番煎じの」を意味するフランス語の言い回し「de seconde main」に拠っている。つまり、この表現には多少とも侮蔑的な意味合いが付きまとうのだが、それに続く言い換え(「または引用の作業」)からも容易に推測されるところ、この大部の書物はテキストにとって最も普遍的と思われる「引用」という行為・現象を歴史的な観点から俯瞰し、「引

用史」とも呼ぶべき壮大なパノラマを提示することを目的に書かれている。この理論的著作はコンパニオンがパリ第七大学に提出した博士論文をもとに執筆されたが、その学位論文の指導には「間テクスト性」の概念で知られるジュリア・クリステヴァが当たり、論文の審査委員には構造主義文学理論の大家御所ジェラルド・ジュネットがその名を連ねていた。だが、読者の予想とは裏腹に、コンパニオンの筆致からは恩師ロラン・バルトや指導教授クリステヴァのエキリチュールが放つ艶やかさや華やかさのようなものは露ほども感じ取ることができない。彼が大胆で煌びやかなバルト流の批評実践に対し一貫して批判的な立場を貫いてきたことは、その方法論やスタイルからも明白に察知することができる。エコール・ポリテクニクなどの理科系教育機関で研鑽を積んだせいか、彼の著作には理路整然とした科学的形式性のようなものが常に色濃く纏いつている。コンパニオンは「引用」の作業を論じるための分析装置として、現象学、記号学、系譜学、修辞学といった諸学問の知見を巧みに取り入れている(チャールズ・サンダース・パースの記号モデルはとりわけ重要である)が、その基本的なスタンスはいったって系譜的、すなわち歴史的である。そこにはバルトのテクスト論と交差するような考察もなければ、「引用」の問題を歴史的作用にまで拡張する「間テクスト性」の問題圏へと議論が展開されていく気配もない。アリストテレス、クインティリアヌス、プラトンといった古代哲学者・修辞学者たちについての考察から始めるこの遠大な「引用史」執筆の試みは、モンテーニュ、パスカル、アルノー、マルブール、マルス、ジョイス、ボルヘスといった近現代作家たちの分析へと連結されている。ある意味では愚直とも感じられるこうした系譜学的総括の試みは、バルト、クリステヴァらの仕事の陰に隠れ、今ではほとんど理論的な関心を呼び覚ますことにはないと思われるが、それでもなお、誰かが毅然としてやり遂げなければならぬ作業であったことは確かであろう。コンパニオンはポスト構造主義と総称される当時の思想的な趨勢に抗しても、敢えてそうした大役を引き受けようとした貴重で真摯な文学理論家なのである。

構造主義、さらにはポスト構造主義の時代に青春を過ごしたコンパニオンは、その後こうした思想的な潮流を批判的に吟味する作業に取り掛かるが、本書執筆当時の彼は依然として構造主義の絶対的影響下に留まっている。このことは、彼の採択した方法が構造主義の産物である記号論と密接に寄り添い、徹底した図式化・体系化に支えられていることから明らかである。コンパニオンは「引用」という込み入った仕掛けを、引用される側のシステムS1と引用する側のシステムS2との関係として捉え、それぞれのシステムは一人の主体(A1またはA2)および一つのテクスト(T1またはT2)によって構成されると考え、つまり、引用はこれら四つの要素の組み合わせ(T1-T2, A1-T2, T1-A2, A1-A2)として類型化され、それぞれの読解・解釈を通じて具体的に起動化されることになる。コンパニオンは、四つの組み合わせのどれが特権視されるかによって、各時代における「引用」の価値評価が決定されるとした。こうした分類的・体系的な方法論はバルトやクリステヴァではなく、明らかに構造主義の先達たちから受け継がれている。本書はそもそも生真面目な一大学院生の博士論文として執筆されたものであり、そこにはポスト構造主義の旗手たちに漂う華麗な雰囲気といったものはない。とはいえ、「引用」という複雑なプロセスを精査する際、この書物は間違いなく、類例なき指針として役立ち続けることになるだろう。



(千葉大学教授・文学理論)